

論 慌 恐

宇野弘藏著



岩波書店

恐 慌 論

宇野弘藏著

岩波書店

恐
慌
論

一九五三年九月一五日 第一刷 発行
一九七六年三月三〇日 第一七刷 改版 発行
一九八〇年六月二〇日 第二二刷 発行

定価 一〇〇〇円

著 者 宇 野 弘 藏

発 行 者 緑 川 亨

発 行 所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
番地 株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三六五十四二一
振替 東京六二六二四〇

印刷・三陽社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

はしがき

恐慌現象が資本主義社会に特有なる必然的なものであるということは、今では殆んどあらゆる人々が認めていることといつてよいであろう。資本主義にこの矛盾の発現の必然性を認めまいとした人々も——それは資本主義の発展の段階によって恐慌もまた異った形態をとつてあらわれることと関連するのではないかと思うが——最近では恐慌でなければ戦争というような、さらに一層困難な問題にさえ当面して来ているのであつて、もはやその否定論をそう簡単には展開することが出来なくなつて来ているのである。そこで問題は、むしろ資本主義の一般的経済法則を説明する経済学の原理論が、何故にこの現象の必然性を反駁の余地なく論証し得なかつたかということにかかつて来る。経済学の原理論を大体において完成した——ものと私の考えている——『資本論』でさえ、そういう論証は与えていないのであつて、マルクスの学説をとる人々の間にも従来種々なる論議が——単に我が国だけでなく、世界的にも——重ねられながら決して体系的に首尾一貫した理論的説明は得られなかつた。そしてそのことがまたこの問題に関する具体的分析を停滞せしめ、むしろその点では多くの俗流経済学のないいわゆる景気変動論を横行せしめることにもなつていふといつてよい状態である。しかし恐慌論がかくの如き景気変動論にすり替えられるといふことは、いい換えれば原理論が現象論に、しかも決して正しく展開されることなき現象論に圧倒せられることに外ならないのであつて、価値論の如き基礎理論までが価格論に埋没せられ、はては解消せられるという傾向をさえ免れない。実際またに精密に考察せられ、正しく展開された価値論によつて原理論が体系づけられたにしても、恐慌の必然性が論証せられな

いようでは、そのいわゆる鼎の軽重を問われるのも止むを得ないであろう。価値論乃至剰余価値論、したがってまた蓄積論において、或いは利潤論、地代論においてマルクスの学説をとる者にとつては、恐慌論の解明は何といつても残されたる重大な課題をなすのであつた。それは『資本論』に完成された形で与えられていないということで、果されなくてもよいとはいえない課題である——と少くとも私は考えるのである。

先に『経済原論』において私は、この点に関しても私なりの解決を与えたのであるが——それは俗にいう盲蛇に怯じずのそしりを免れないものかも知れないが——そこでは当然のことながら何故に恐慌論が原理論の一定の段階で、具体的にいえば商業資本に先んじて、しかし貸付資本の後に展開されなければならないかは、特に論じなかつた。そしてその点はおそらく多くの読者には、従来しばしば種々なる論議を重ねられて来ただけに、納得のゆかないものを残すことになつたのではないかと思う。勿論、本書の如く特に恐慌現象をとつて論ずる場合には、本来ならば従来の論議をとりあげてこれを検討した上で自己の見解を述べるべきであらう。しかし私には少くとも現在においてはその余裕も、そしてまたその能力も十分にはないので、先に『経済原論』で述べたところをやや立入つて論証するに留めたのであるが、『原論』の場合に当然言及する必要のなかつた上述の如き方法的な点については、私の見解を新しく論述しておいた。またそれは『原論』の展開を幾分でも理解し易くするのではないかと考えて、そうしたのであるが、本書で序論的部分が不釣合に長くなつたのもそのためである。

本書は、先年、東京大学経済学部の特設講義として講じた講義案を加筆し、後に法政大学通信教授の『経済原論』の特設講義として発表したものであつて、極めて基本的な問題にもしばしば言及することとならざるを得なかつたのであるが、それは反つて私のこの問題に対する考え方を理解していただくに便利かとも考えたので、この度一般に公開するにあつても多少語句の訂正を加えただけで書き改めなかつた。附録の小論二篇は、東京大学社会科学研究所

の『社会科学研究』並びに一橋大学の『経済研究』に発表したものであって、『資本論』における恐慌理論の展開に難点をなすもの——と私の考えた点——を論じたものである。本文の方に大體積極的に述べたものではあるが、すでに『資本論』に或る程度展開されている理論をよりどころとする私にとっては、これに対する私の考えを明確にしておくことが当然と思うので敢えて附録としたのである。なおこの附録一の小論では、久留間敏造教授の研究を手がかりとして論じたので、教授からその『恐慌論研究』新刊に際してその中で私の理解の不十分なる点についての批評を受けているのであるが、その点については特にお答えする必要はないもののように考えるし、またたいてい教授の論文に対する私の理解に不十分なる点乃至誤解があったとしても、小論の論旨そのものには変更を加える必要はないと考えられるので、そのまま採録することにした。教授の批評の内唯一の積極的なものと考えられる点——それは経済学の原理論で賃銀が労働力の価値以上に、或いは以下に動く場合を論じてよいか、どうかという点であるが——その点に関しても或る程度本書の中で論及しているのであるが、私は問題の性質によっては賃銀ばかりでなく、他の商品についても当然にかかる変動に論及しなければならぬものと考えている。『資本論』自身でもそうしているのである。もっともこの点については、なお労働力なる商品が、他の商品と異って資本家的に直接生産され得ないという事実のうちに極めて興味ある問題があり、他の商品の価格の変動との相違をも明らかにし得るのではないかと考えている。問題点が明確になったならば別の機会に論じて見たいと思う。

従来、難問中の難問とせられ、種々なる論議を重ねられて来たこの問題に対して、本書が——『経済原論』と共に——果たしてどの程度まで科学的批判にたえ得る説明を与えているか、——その点については、読者諸君の判断にかせたい。

は し が き

昭和二十八年七月二十八日

著 者

目次

はしがき

序論.....七

一 典型的恐慌現象.....二四

二 恐慌論と外国貿易.....三五

三 恐慌現象における商業資本の役割.....四四

四 資本主義社会における恐慌の可能性と必然性.....五〇

第一章 好況.....六二

一 好況期における資本の蓄積.....六三

二 信用の演ずる役割.....六六

三 投機的発展と物価騰貴.....七五

第二章 恐慌.....八〇

一 利潤率と利子率との衝突.....八一

A 資本の蓄積の増進に伴う利潤率の低下.....八二

B 好況期における利子率の昂騰.....八四

C いわゆる資本の欠乏.....八七

目次

| | |
|----------------------------|----|
| 二 資本の過剰と人口の過剰 | 三二 |
| A 労働賃銀騰貴の限界 | 三三 |
| B 商品の過剰としての資本の過剰 | 三六 |
| C 「豊富の中の貧困」 | 四一 |
| 三 資本価値の破壊 | 四三 |
| 第三章 不況 | 四七 |
| 一 再生産過程の停滞 | 四七 |
| 二 生産方法の改善による新たな蓄積の発足 | 五二 |
| 三 好況への転換 | 五六 |
| 第四章 景気循環の回転期間 | 五九 |
| 第五章 資本主義社会における恐慌の必然性 | 三〇 |
| 一 機械的必然性と歴史的必然性 | 三一 |
| 二 恐慌の必然性と崩壊の必然性 | 三八 |
| 三 恐慌論と恐慌の分析 | 四五 |
| 附 録 | 四七 |
| 一 『資本論』における恐慌理論の難点 | 四七 |
| 二 『資本論』における恐慌の必然的根拠の論証について | 六三 |

序論

一九二九年の十月のニューヨーク株式市場における瓦落^{ガラ}を契機として勃発した恐慌は、最近における最も深刻なる極めて広範囲にわたる世界的大恐慌であった。三十年代前半はそれがためにこれもまた極めて深刻な世界的不況が続いた。世界主要資本主義諸国はいずれもこの不況をそのままにしておくわけにはゆかなかつた。あらゆる手段をつくしてその「救済」をはかつたのである。三十年代の諸国が特に著しく国家主義的傾向を強化し、やがては第二次世界大戦を惹起するようなことになつたということも、その根本的原因は、この経済的過程にあつたといふことが出来るのである。ところがこれほどの大恐慌も、その前年までは、アメリカでは殆んど誰れ一人として予想しなかつた。⁽¹⁾ いわゆるフーヴァー景気として知られる繁栄が続いて、第一次大戦後の世界的な慢性的農業恐慌⁽²⁾さえ問題にされなくなつていたのである。一九二八年の大統領選挙戦当時「フーヴァーはアメリカ国民に対して、台所にはいつも鶏が二羽用意されており、ガレージには自動車⁽³⁾が二台ある、これがどこの家庭でもあたりまえの生活水準と考えられるようになる⁽⁴⁾、と断言した」のであつた。産業部門によつて必ずしも一樣にその生産を増加したとはいえないし、失業者も完全に就業し得たとはいえないが、二八年から九年の前半の好況は、未曾有のものであつた。

(1) 例へば最近邦訳された『アスピリン・エイジ』(I・レイトン編、木下秀夫訳、岩波現代叢書)なる文集に掲載されている「瓦落^{ガラ}」それはこういうことだつた」の内に、一九二九年一月一日のニューヨーク・タイムズの年頭の社説から次のような引用がなされている——「一九二八年はもう『死んだ過去』で、急いで埋葬しなければならぬ、などと一般の人々に思い

込ませるにはなかなか骨が折れるであろう。それは、これまでにみられなかった進歩の年、まことに素晴らしい繁栄の年であった、——少くともこの国においてはそうであった。……もし、過去をもつて将来を測る方法があるとするれば、この新年は慶祝と希望に満ちた年となるであろう(上掲邦訳書一—一九二頁)というのである。

(2) 農業恐慌という場合の恐慌は、ここで説く一般的な産業恐慌と区別しなければならぬ。その点は、資本主義の発展の農業に及ぼす特殊な影響を明らかにした上でないとは解明することは出来ないが、それは周期的に襲来する——したがってまた恐慌が不況を通して好況に転ずるといふ——ものではない。十九世紀後半世界的な交通関係の発展に伴う西欧諸国の農業恐慌とか、さらにまた第一次世界大戦後の植民地農業の発展に伴う世界農業恐慌というのは、資本主義の発展の一定の段階にあらわれる、そしてまた世界市場の特殊な関係を基礎とするものであって、資本主義の一般的な規定の下に明らかにされる恐慌とは性質を異にしている。ただそういう一般的な産業恐慌——その内には農業をも含み、理論的にはその農業がまた資本家的に経営されていることを前提としなければならないのであるが、それ——もまた後に述べるように資本主義の発展の段階によって具体的に異った現われ方をするし、第一次大戦後の世界農業恐慌は、二九年の大恐慌後の不況を一層強化することになり、最近の資本主義の段階では実際上分離して考えるわけにはゆかないという関係にある。しかし理論的にはここで明らかにしようとする恐慌とは区別して考えなければならぬ。また実際そういう一般的な規定では後に述べるように資本主義の発展に伴う恐慌現象の型態上の変化自身も捨象しなければならぬのである。

(3) 前掲『アスピリン・エイジ』一—一九四頁。

(4) アメリカ合衆国における月平均工業生産額は、一九二七年十二月を一〇〇として次の如き指数を示している。

| | 全工業 | 鉄及び鋼 | 自動車 | 織維 | 皮革及び靴 | 食料品 |
|----------|-----|------|-----|-----|-------|-----|
| 一九二七年十二月 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 |
| 一九二八年 六月 | 一一一 | 一一一 | 一五三 | 一〇三 | 一〇四 | 九七 |
| 十二月 | 一一七 | 一一一 | 一九七 | 一〇六 | 九七 | 一〇九 |
| 一九二九年 六月 | 一一九 | 一六五 | 二一九 | 一一六 | 一〇八 | 一〇〇 |

(The Course and Phases of World Economic Depression, Geneva 1931, p. 124.)

失業者については、労働組合員の失業率が、アメリカでは一九二八年、一九二九年の九月においても一二%、一三%であったと云われらる。(ibid., p. 69.)

一九二九年秋の恐慌勃発当時の様相については、前掲の『アスピリン・エイジ』中の一文が極めて如実に描写しているので、少し長いが引用して見よう——「ウォール・ストリートの空気はこうした(前にあげたフーヴァー大統領選挙戦当時の)楽観的な気分とピッタリ合っていた。一九二八年の五月と六月には株式市場には気迷いの気配が見えたが、十一月の選挙日が近づくにつれ、株式市場は高騰した。そして、フーヴァー氏が、民主党のアル・スミス候補を二千万票対千五百万票で破って大統領に当選すると、ダウ・ジョーンズ経済通信社の報道する工業株指数は三〇〇に急騰した。まさしく『新時代』が到来したのである。新しい一派の経済学者は、株を買うなら、現物はやめて必ず先物にしなければならぬ、と論じていた。五年、十年もさきの、空想の域を出ないような投機株が人気を呼んでいた。……U・S・スチール、アメリカン・テレフォン、イーストマン・コダックといった一流株はいずれもこれまでになり高値を現出していた。

「一九二九年三月四日の大統領就任式当日になると、ウォール・ストリートはいよいよわきたつていった。ダウ・ジョーンズ経済通信社の報ずる工業株指数はさらに二十ポイントも上っていた。四月になって株式市場にやや動揺の色が見えると、ウォール・ストリートの株式専門家はこれをもって『買い時』としていた。そしてまた、その後二、三ヵ月の間はまさしくその通りだったのである。八月になると、ダウ・ジョーンズ経済通信社の工業株指数は三八〇というところまでいっていった。しかし、それにもかかわらず、以前のような活気は、どういうものか、どこことなく欠けているようだった。共同の投機組合がさかんに活躍したが、市場は低迷して、はかばかしくは動かなかつた。すると、九月の第一週に入って三八一というところまで高騰した。これが今までのところ高値の最後であった。

「九月上旬のうちに下落し出した。この月の中頃に一時持ち直したはしたが、結局、これは最後のあえぎにすぎなかった。取引の清算がふえて来た。株式仲買人の事務員たちは、取引先に頭金の払込催促を出すのに一日中追われる有様だった。そして、ついに、あの十月二十四日の木曜日がやって来た。恐慌である。一時は二六一 $\frac{3}{4}$ ドルの高値をよんだことのあるU・S・スチール株は、この日の寄り付きが二〇五 $\frac{1}{2}$ ドルだったが、たちまちに二〇〇ドル台を割り、間もなく一九三 $\frac{1}{4}$ ドルと下った。ジュネラル・エレクトリックも、わずか数週間前までは四〇〇ドル台で取引きされていたものが、当日は寄り付きの三一五ドルからたちまち二八三ドルまで暴落してしまつた。……

「……一九二九年十一月十三日がこの恐慌のクライマックスであつた。ダウ・ジョーンズ経済通信社の平均株式指数は一九八・七まで落ちていた。そして、花形株、主要株が続々枕をならべて暴落を演じた。アメリカ罐詰株などが一八一 $\frac{1}{8}$ ドルから八六ドルに惨落してしまつたほか、アメリカ電信電話株が三〇四ドルから一九七 $\frac{1}{4}$ ドル、ジュネラル・モーターズが七二 $\frac{3}{4}$ ドルから三六ドル、ニューヨーク・セントラルが二五六 $\frac{3}{8}$ ドルから一六〇ドル、U・S・スチールが二六一 $\frac{3}{4}$ ドルから一五〇ドルへとそれぞれ暴落した。まことに『大強気相場は終りを告げた』のであつた。そして、これとともにクリッジッフヴァー景気も終りを告げたのであつた。〔前掲書一一九四―六頁〕

かくて三〇年以後は、アメリカも二八年までは予想もされなかつた不況に陥つた。生産は減退し、失業は増加し、在荷は容易に減少しなかつた。一般物価も急激に下落していった。特に農産物価格の下落は大きかつたが、概して原料品においては、完成品よりその下落が著しかつた。⁽¹⁾一九三二年の大統領選挙でルーズヴェルトが当選し、有名なニュー・ディール政策が行われることになつたのであるが、それは全くインフレ的不況対策に外ならなかつた。この恐慌は、資本主義社会の生産力の増進がいかなる結果を齎らすものであるかを明らかに示すものである。フヴァー大統領のいうように、それは単に各家庭に「台所にはいつも鶏が二羽用意されており、ガレージには自動車が一、二台あ

る」というようなことですまされるものではない。生産力の増進にもとづいて一般に生活水準が向上したとしても、それは単にかかるものとして実現されるものではないのである。三十年代の不況期に、多くの国で公共事業が、この生産力の増進を始末し得なかつた資本主義に対する救済策として採用されたにしても、それは決して資本主義自身を救済し得るものではなかつた。三八年にはすでにイギリス、アメリカ等が恐慌状態に陥り、軍備の拡張に向つていたドイツ、日本等がこの転換を免れたということは極めて注目すべき現象といつてよい。現在までに二九年の大恐慌が繰り返されないでいるということは、その間に第二次の世界大戦という異常な、そして極度の消耗が行われたということと考え合されなければならないのである。

(1) アメリカにおける工業生産の減退は次の如き趨勢を示している(ヴァルガ『世界経済恐慌史』邦訳慶応書房版第一巻第二冊四二八—九頁より)。一九二三—五年を一〇〇として、

| 年次 | 指数 |
|------|-----|
| 1925 | 104 |
| 1926 | 108 |
| 1927 | 106 |
| 1928 | 111 |
| 1929 | 119 |
| 1930 | 96 |
| 1931 | 81 |
| 1932 | 64 |
| 1933 | 76 |
| 1934 | 79 |

失業の増加については次の失業率から大体の傾向は知ることが出来る。(同上四三〇頁)

| 年次 | % |
|------|-----|
| 1925 | 8.9 |
| 1926 | 7.5 |
| 1927 | 14 |
| 1928 | 13 |
| 1929 | 12 |
| 1930 | 21 |
| 1931 | 26 |
| 1932 | 32 |
| 1933 | 31 |
| 1934 | 26 |

なおヴァルガは「恐慌の最深点における失業者は、千五百万—千七百万に達した。恐慌克服後における生産の増大は、それに対応するだけの就業者数の増大をもたらさなかつた」といつている。(同上四三六頁)

在荷量については次の如き指数によつてその一斑を知り得るであろう。一九二三—五年を一〇〇として、

| | 原料品 | 製造品 |
|----------|-----|-----|
| 一九二九年 六月 | 一一〇 | 一一一 |
| 〃 十二月 | 一八六 | 一一九 |
| 一九三〇年 六月 | 一二五 | 一二五 |
| 〃 十二月 | 一九五 | 一一一 |
| 一九三一年 六月 | 一四四 | 一一〇 |

(The Course and Phases, p. 145.)

| 年次 | 一般物 価指数 | 農産物 価指数 |
|------|------------|------------|
| 1925 | 151 | 154 |
| 1926 | 146 | 141 |
| 1927 | 139 | 139 |
| 1928 | 141 | 149 |
| 1929 | 139 | 147 |
| 1930 | 126 | 124 |
| 1931 | 107 | 91 |
| 1932 | 95 | 68 |
| 1933 | 96 | 72 |
| 1934 | 109 | 92 |

(ヴァルガ同上四三二頁)

原料品と製造品との比較は、勿論この時期にはいわゆる独占体の価格に及ぼす影響もあつて、これを直ちに一般化するわけにはゆかないが、アメリカでは一九二九年六月に対して三一年六月には、前者では三〇%、後者では二〇%の下落を見たといわれている。(The Course and Phases, p. 168.)

しかしこれから述べようとする恐慌論は、こういう個々の恐慌の過程を分析しその原因を明らかにしようとするものではない。勿論、経済学的研究にとっては、そういう個々の恐慌現象を分析し、その原因と結果とを明らかにすることゝも極めて重要な仕事であり、或いはむしろ経済学的研究の窮極の目的の内に含まれるものといった方がよいのであるが、しかしそれはいきなりそういう具体的過程の分析をしたからといって成功するわけではない。現に先に引用した『アスピリン・エイジ』中の一文の如きも、好況期は勿論のこと、恐慌後の不況期においても政治家や実

業家や経済学者までがいかに事態の本質を知らないで種々なることをやって来たかは、極めて要領よく相当鋭く批評しながら叙述しているのであるが、恐慌の原因についてはなんら解明するところはない。もっともあの小論はそういうことを目的としたものでなく、単に「瓦落」とはどういうものであるかを物語るものに過ぎないのであるが、現実の恐慌の過程の分析が十分なる資料を与えられてもいかに困難なるものであるかは、先に引用した国際連盟の『世界的経済不況の経過と諸局面』を見ても明らかである。それは決して納得のいく解明を与えてはいない。⁽¹⁾この点は、しかし経済学の研究について極めて重要な方法論上の問題を含むのであって、本論に入るに先だって、一応私の考えを述べておきたいと思う。

(一) 国際連盟はなお World Economic Survey によつてもこの恐慌後の不況について資料と解明とを与えているが、その解明がいかなるものであるかは、久留間鮫造氏の批評に明らかである。同氏の『恐慌論研究』(新評論社版一二九―五一頁)「Ⅳ」ノドリフ教授の恐慌分析を評す」参照。

元来、経済学の研究の対象をなす資本主義的商品経済なるものは、いうまでもなく人類の歴史と共に始まるものではなく、一定の時期に、それも人類の歴史からいえば極く最近の、十七、八世紀以後に出現したものである。勿論、商品経済自身は相当古くからあり、古代、中世の世界を通して発展して来たといつてよいのであるが、そしてまたそれがために恐慌に類似した現象も時には起つたといわれているが、しかしそういう商品経済も決して簡単に一筋の発達^の道を辿つて来たものではない。むしろ資本主義以前の社会では、種々異つた程度に行われながら、その社会の基本的な社会関係を律するものとしての地位は与えられていなかった。これは商品の性格自身から来ることで、極めて重要な点である。元来、商品交換なるものはマルクスも指摘しているように「諸共同体の終るところで、諸共同体が他の諸共同体・あるいは他の諸共同体の諸成員・と接触する点で始まる」(『資本論』第一卷、邦訳〈長谷部文雄訳〉日本評論

社版第一分冊二八六頁(向坂訳、岩波書店版第一卷一一五頁)ものである。それはいわば社会の内部から出て来るものではなく、社会と社会との接するところに生じ、それが社会の内部に滲透するにしたがって、そういう諸社会を一つのより大きな社会に結合し、一社会を形成していくという性格をもっている。いわゆるゲマインシャフト(Gemeinschaft)とゲマインシャフトとがゲゼルシャフト(Gesellschaft)として結合される——それが商品社会である。古代、中世の社会でも商品経済は大體そういう役割をもっていたものと解してよいのであるが、それと同時にそこでは本来の古代、中世の社会とはその範囲を同一にしない社会を——しかも本来の社会に代って一社会を形成するところまではゆかないで、いわば社会外の社会を形成することにはしばしばなるのであった。しかしまたかくの如き商品社会の形成は、本来の社会の内部にも滲透し、これに一方ではその社会の生産力を増進するという点で影響し、他方ではそれによってその社会の、例えば中世ならば領主と農民との関係を多かれ少かれ破壊せずにはいなかったのである。したがってまた商品経済が発達して、今日の資本主義社会のようにその社会の基本的な社会的関係を律するようになるということも、単に商品の交換関係が社会の範囲を拡大しつつ、その内部にも滲透してゆけば必ず実現されるというものではなかった。むしろ反対に多くの国々は、この過程の内に崩壊していつて、新しく、しかし従来の歴史的発達の結果を、それも大體は商品交換の關係を通して取入れ、これをいわば消化した国々によって受けつがれて、ますます広範囲の商品經濟を確立するという過程をとったのであって、十七、八世紀のイギリスにおいて始めて一社会を律するものとなり、資本主義社会の発生を見ることになったのであった。いわばゲマインシャフトとしての社会がその根柢までゲゼルシャフト化されて来たのである。

このことはまた資本主義自身にも一定の発達の過程のあることを示すものに外ならない。いい換えれば歴史的に一定の時期に、しかも世界的には殆んどイギリスを中心とするという極く限られた地域に発生し、漸次に他の諸国にも